平成元年7月28日第3種郵便物認可　2002年4月24日発行　毎月2回第2・第4水曜日発行　第14巻第8号通巻293号

スクープ！
リコフスキー ロシア極東全権代表「金正日シベリア鉄道同行記」

SAPIO

国際情報誌
サピオ
INTERNATIONAL INTELLIGENCE MAGAZINE

SIMULATION REPORT このミリオネアたちの生き様から"元気の素"をわけてもらおう

アジアの大金持ち列伝

SPECIAL REPORT 大前研一ほか

伏魔殿・ODAを叩き潰せ

小学館
4/24
定価¥400

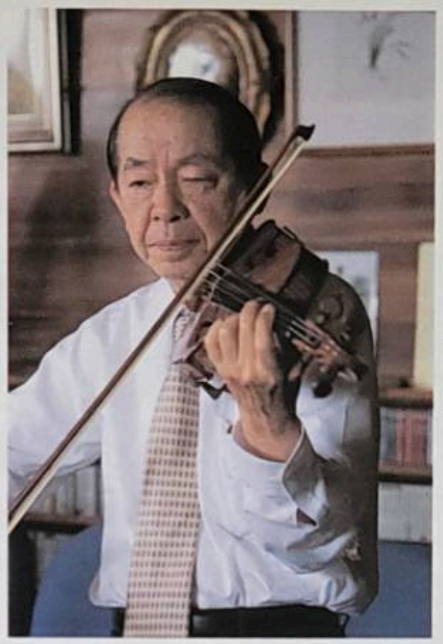
2002年

金銭哲学

許文龍 奇美実業オーナー「いまは釣れた魚＝富を放流しているんです」

世界一のABS樹脂メーカーにして超親日家。台湾が誇るミリオネアには、気骨と信念と哲学があった

ジャーナリスト 平野久美子
HIRANO Kumiko



【PROFILE】名器"Viotti"（ヴィオッティ）を弾く許文龍氏。1928年台湾・台南市生まれ。日本統治時代の台南高工機械科卒業。1959年奇美実業創設。

台湾有数の企業グループ「奇美実業有限公司」は世界一の売り上げを誇るABS樹脂事業をはじめとして、電子機器、食料、医療等を経営するコングロマリットだ。

グループを率いる許文龍会長は一代でこの会社をおこし、台湾の中では立志伝中の人物として知られている。

李登輝前総統の信頼も厚く台湾の政財界の実力者として、また大の親日家でもある。その巨額の富を築いたマネーポリシーと人生哲学を、台南市の自宅で披瀝してもらった。

＊

台湾全土で展開する便利商店（コンビニエンスストア）「統一超商」（セブンイレブン）で、ぶくっとした肉まん（10元＝約37円）を買った時、「これも奇美？」。思わず口走ってしまった。

車の内装部品や電化製品、生活雑貨のほとんどが、奇美実業が作るABS樹脂を加工したものからできているとは知っていても、グループの食品会社が冷凍餃子を1日に135万個も作り、日本にも輸出していることはあまり知られていないだろう。

ローテクの肉まんからハイテクの電子液晶部品までを生産するグループ企業を傘下に持つ奇美実業は、芸術肌の許文龍氏（74）が率いる企業集団だ。台南市郊外に建つ本社屋前のレプリカ像「サマトラケのニケー」は、エーゲ海ならぬサトウキビ畑からの風に翼をふくらませ、同じくミケランジェロの「ダヴィデ」像は35万坪に及ぶ工場群を見据えている。未来都市の様相をなす広大な一画こそ、世界一の生産高を誇るABS樹脂の生産拠点である。

2000年度の営業収入は約1597億7280万円、資産総額は約1572億7600万円。

小さな町工場を、わずか34年で世界一のABS樹脂メーカーに育てた許文龍氏の経営手腕と生活文化の創造は内外で高く評価され、1999年度には「日経アジア賞」を受賞。台湾の"十大傑出企業家"には数年連続で選ばれている。しかし当のご本人は仙界の住人のようなことを言う。

「僕は週に2日しか働かんのですよ。あとは好きなことすると50歳から決めたんです。人生の愉しみは省略できませんが、会社の仕事は省略できます」

週休2日ならぬ週働2日制。朝4時に起きて釣りに出かけ、出勤日以外は昼寝の後に絵を描いたり読書をしたり、趣味優先の生活を20年以上も続けているのだ。

釣果のニベ（イシモチ。29・5kg）の魚拓を張り出した自宅で許氏はこう話す。

「釣りと同じでね、企業は利益を追求している間が面白いんです。でも魚が釣れたら放流する人だっているでしょう」

絵画から剥製まで60億円"荘周夢蝶"の博物館

奇美グループが、文化や福祉に力を入れていることはよく知られている。

中でも、本社屋の5階から8階までを占める「奇美博物館」は年間80万人が訪れる台南の名所だ。「利益を上げる目的ではないから」と入場料を取らず、無料コンサートも定期的に行なっている。

「もともと絵が好きだから、いい作品が手に入れば自慢したくなる。人に見せるなら美術館作るのが一番いい。人様に話すほど立派な動機で建てたわけじゃないんですよ」

と謙遜するが、企業収益の10

上／遥か地平線まで続く広大な台南市郊外の工場全景。年産100万tを超えるABS樹脂を製造している。
下／ギリシア、ローマ、ルネッサンス期の彫刻を配した本社屋の威容。博物館の入り口は左手にある。

【PROFILE】東京生まれ。1973年学習院大学仏文学科卒業。出版社勤務を経てフリーランスのエディター、ライターとして活躍。アジアを中心に幅広い執筆活動を行なう。中国茶愛好家でもあり造詣が深い。『淡淡有情』（小学館）で第6回小学館ノンフィクション大賞受賞。『アジアンティーの世界』（河出書房新社）『カンボジアは誘う』（新潮社）など著書多数。

%にもあたる莫大な予算と私財を投じての文化活動は、虚栄心だけで出来るものではない。この10年間に集めた美術品の時価総額は約60億円。

1977年には奇美文化基金会を設立し、博物館の作品収集は毎年4億円以上の予算で現在も着々と収集を進めている。

「買うべき作品をカタログから選んで、AAA（トリプルエイ）から順にCまで印をつけます。絵画の場合、作者にはまったくこだわりません。作品自体の魅力と描かれた年代と値段だけを見て選ぶ。説明文もあまり読まないですよ」

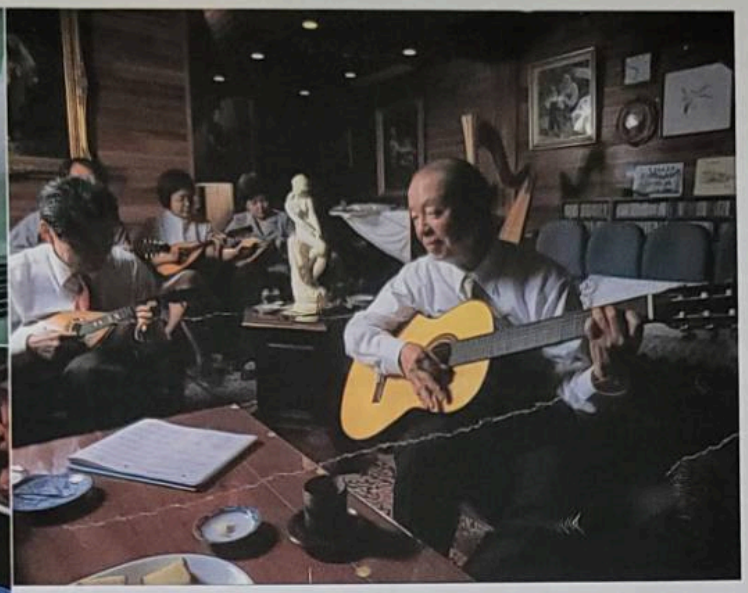
このチェックをもとにして、専門のスタッフがニューヨーク、ロンドン、パリで行なわれるオークションから作品を競り落とす。

気に入った作品があれば〝ボウト・イン〟(bought in)と呼ぶ売れ残りからも躊躇なく購入するという。

「日本人が買ったゴッホの『ひまわり』一枚で、うちが所蔵する絵画をすべて買えるかもしれませんが、果たしてどちらが価値があるのか……。僕は一般の人が観てわからない絵は買いません」

西洋絵画、彫像、中国骨董、古典楽器、各国の武具、宇宙の隕石、化石、アジア一を誇る動物標本などが所狭しと並ぶ館内を一巡すると、荘子の言葉「荘周夢に胡蝶と為る」(荘子が胡蝶になり飛び回る夢を見た時に我を忘れてしまい、夢か現実か区別がつかなくなってしまったことをうたったもの）にも似て、不思議な高揚感が沸き上がってくる。

夢うつつの人生に絶対的なものを見いだそうとする気迫、永遠性や美への渇望……。そんなオーナーの意志と個性が、館内にはあふれている。



左上／「奇美食品公司」は、唯一日本の輸入食品衛生基準に合格している。博物館のカフェでは特製プリンが注文できる。

左下／許氏の好物の大根餅。台南の坦子麵（タンツーメン）など昔ながらのふるさとの味がお好みで、外食はほとんどしない。

上／音楽仲間と自宅で開くホームコンサート。民謡からクラシックまでレパートリーの広さに驚く。

人生を変えたある日本人教師との出会い

1928年（昭和3年）生まれの許文龍氏は、日本統治時代の教育を受けたいわゆる〝日本語人〟だ。

氏の人生観や趣味を決定づけたのは、公学校（台湾人の子弟が通った学校。後に小学校とともに国民学校に改称）時代の日本人教師だった。日頃からフランスの思想家ルソーを引き合いにだして物質的なものより自然を愛するよう指導してくれたその先生は、ある日、敬虔な農民の祈りを描いたミレー作の『晩鐘』を生徒に見せた。

「君たちに鐘の音が聴こえてくるだろうか」

食うや食わずの生活の中で肺結核まで患っていた少年に、一枚の絵と教師の言葉がどれだけの福音をもたらしたことか。許少年は、その絵の美しさにうたれ、鐘の響きを夢想しながら、至福に浸る。

「人間は何のために働くのかとずっと考えていた僕にとって、衝撃的な体験でした。先生に出会ったことで、先天的な感性が目覚めたんです。

担任だった期間はわずか2年でしたけれど、あの出会いがなかったら、現在の自分は存在していない」

奇美コレクションの中でも世界的に有名なのは17～18世紀に制作されたヴァイオリンの名器だろう。アマティ、グゥワルネリ、ストラディヴァリ、シュタイナーなど20数本を所有している。

「今までに1000万米ドル（約13億3000万円）くらいは使ったでしょうね。こうしたヴァイオリンは、現代科学をもってしても構造や音色が解明できない奇跡です。いくらお金をかけても惜しくありませんね」

内外の演奏家に弾いてもらってこそのコレクションだという許氏のもとへは各国から貸し出しの依頼が来る。

「皆さん、保険の掛け金が大変だろうとおっしゃるが、子供が死んでカネだけ戻ってきたってちっとも慰めにならんでしょう。保険なんてあまり意味ないですよ」

高額で希少価値があるから大切なのではなく、自分でも演奏し音色の美しさを知り尽くしているから、名器のひとつひとつが愛しくて仕方がない。

「45歳から鈴木鎮一教本いわゆる鈴木メソッド（世界的に有名なヴァイオリンの基礎教本）を使って、〝きらきら星〟の練習をしたんですよ。寝る前に毎日30分ね」

努力のかいあって今ではマンドリンやギターもそつなくこなす。自宅に楽器を借りに来た著

名なチェリスト、ヨーヨー・マと即興演奏を愉しんだこともあり、気の合う音楽仲間とホームコンサートを開くのが、何より好きだという。

「おカネは使ってこそ価値が出る」

許氏は趣味以外はほとんどお金を使わない。驚くべきことに役員賞与もなく月給は10万元(約37万円)だ。しかし、実際は月給全額を系列の「奇美医院」に寄付しているので、給料は無きに等しい。

「生活費ですか？株の配当金が銀行に振り込まれるから、必要な時だけおろします」

ならば財布の中身を教えて欲しいとお願いすると、ポケットから黒い革財布を取りだして紙幣を数え始める。1万6000元（約5万9000円）入っていた。

「家内がいつも2万元（約7万4000円）入れてくれたので、それを目安にする習慣ができているね。使うのは釣りのエサ代くらいですよ。買い食いもしなくなったからね」

日常のこまごまとした買い物は、すべて専用運転手が代わりにやってくれる。

「もちろんカネは大事なものですよ」

許氏は財布をしまいながら、付け加えた。

「欲しくないなんていう人は嘘つきですよ。カネほど使い道がたくさんあるものはないし、人にやって多すぎたと言われることもない。使ってこそ価値が出るものですよ。しかし、僕は贅沢や美食に興味がない。奥さん10人持っても大変なだけですしね（笑）」

いたってシンプルなのだ。

「小さなカバンひとつでどこへでも行きます。外国でもめったに買い物をしないから、こんなもの使ったことないんです」

と笑いながら取りだしたのは、なんと税関のフリーパスだった。台湾では模範的な高額納税者に、わずらわしい通関を免除する特待カードを政府が発行してくれるのだという。

適材適所に人材を配しながら組織を活性化し、未来のビジョンを示すというトップに与えられた使命を、週働2日でみごとにこなす許氏は、従業員にも仕事以外の人生を愉しませたいという配慮から、政府に10年も先駆けて1988年に週休2日制を導入した。

ユニークな経営哲学でここまでに成功した秘訣を伺うと、生来備わっていた直感力と子供時代からの虚弱体質と運の良さをあげる。

体力に自信がありすぎてもダメなんですね？

「体が弱いと少ないエネルギーで多くをなすことを考えるんですよ。

おかげで、人の力を借りて自分のやりたいことをするノウハウが、子供時代から身に付きましたね」

新規事業への設備投資も対中投資も「ノウハウの蓄積がある人をうまく使えば実現可能なんですよ」。

ところで、立法院の発表によれば、上場企業305社がすでに対中投資に参加し、その総額は1228億台湾ドル（約4500億円）に及んでいるものの、台湾への還流資金はわずか0・63%と、数字がその難しさを物語っている（「月刊東亜」霞山会発行・2001年5月号より）。

しかし、中国の発展は、世界の発展にも必要不可欠のものである。それにどう貢献し、どう利用していくかが、台湾企業にとっても日本企業にとっても課題となる。

現在の日本経済については許氏はこのように助言する。

「日本人はすぐに大騒ぎするけれど、危機なんてねえ、そう簡単に来るもんじゃない。毅然と対処すればいいんです。大変だ、未曾有の経済危機だと騒ぐ前に、正常な状態に戻るひとつの転機として前向きにとらえることですよ」

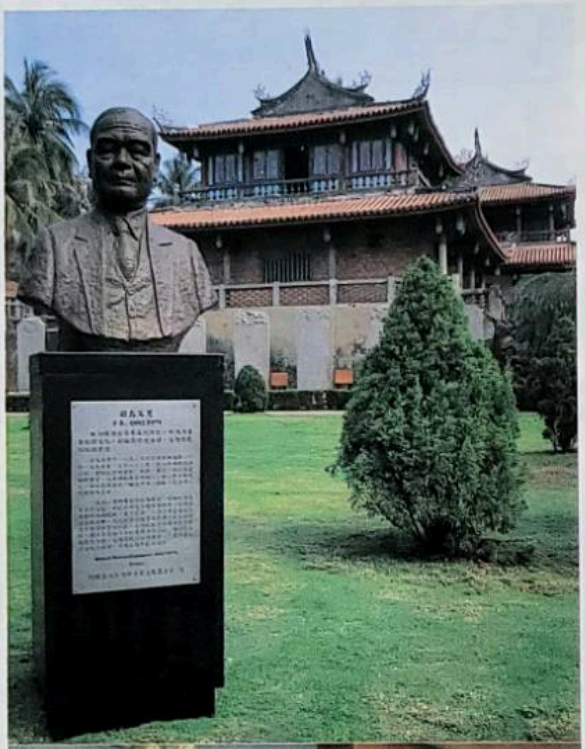
使命感に燃えて台湾を近代国家に導いた戦前の日本の指導者の、信念ある態度を見習ってほしいとの思いからだろうか。台湾総督府の民政長官を務めた後藤新平、台湾の治水事業に貢献した八田與一、台南市の史跡を戦火から守り通した羽鳥又男ら各氏の胸像を作り、ゆかりの地や奇美博物館に展示した。

胸像には、許文龍氏から日本人へのメッセージが込められている。

最近、遺書を書き直した。

「子供たちにはカネは残しません。残してもほんのちょっとだけ」

お金のありがたさとお金の意義を、十二分に心得ているあっぱれなミリオネアである。



上／台南の観光名所の赤嵌楼（チーカンロウ）と戦前の台南市長・羽鳥又男の像。戦時下にもかかわらず台南の史跡を守り抜いた功績が市民から評価されている。下／奇美博物館に展示されている後藤新平像（手前）と八田與一像。

次号の『SAPIO』は4月第4水曜の4月24日に発売します。（一部地域では、発売日が異なる場合があります）

撮影／陳志海、陳志成（泰維）

上／中国古美術品のコーナーにエジプトのミイラを展示しているのは、「他の文明と比較しながら客観的に中華文化を把握するため」と潘元石館長。
中／5階の西洋芸術館にはコロー、デュプレらの作品のほか、19世紀の絵画が集まっている。
下／8階の自然史館には剝製専門家によって永遠の命を授けられた世界中の動物が集合。北極熊の立像や巨大アザラシなども圧巻。